

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月 7日現在

機関番号：25403

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520103

研究課題名（和文） オーラルヒストリーによる1960年代前衛美術研究の再構築

研究課題名（英文） Studies on Avant-Garde Japanese Art in the 1960s through Oral History

研究代表者

加治屋 健司（KAJIYA KENJI）

広島市立大学・芸術学部・准教授

研究者番号：70453214

研究成果の概要（和文）：

オーラル・ヒストリーの方法を用いて、1960年代の日本における前衛美術に関する研究を再構築した。地方の美術活動を視野に入れながら、合計47名の美術関係者（美術家、デザイナー、写真家、建築家、音楽家、美術評論家、画廊主、団体職員など）に90回の聞き取り調査を行った。戦後日本の前衛美術運動は、地方の文化や社会、ジェンダーの問題、国内外の他芸術の動向と深く関係しながら、多様な考えと形態を伴って展開したことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

This research investigated avant-garde Japanese art in the 1960s through oral history. It collected ninety oral history interviews with forty-seven people including artists, designers, photographers, architects, musicians, art critics, gallerists, and organization officers, with special attention to artistic activities in rural areas. It revealed that avant-garde art in postwar Japan developed with diverse ideas and forms that were involved with the culture and society in rural areas, gender issues, and other fields of arts at home and abroad.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：

科研費の分科・細目：

キーワード：

1. 研究開始当初の背景

戦後日本の前衛美術に関する著作や論考は数多く発表されていたが、総論については、批評的な視点から書かれた論考や、歴史的・

社会的な背景の説明に重点を置く研究が多く、当事者の声が見えにくい状況があった。個々の動向については、展覧会図録や、動向の中心人物による回顧的文章が主要な文献

となっており、いずれの場合も、中心人物の考えを大きく取り上げる傾向があった。そして、総論・各論ともに、東京の動向に関する考察が大半で、地方で展開した前衛美術の動向は論じられることが少なかった。

これらの偏差を是正するためには、オーラル・ヒストリー（口述史料およびその研究）の方法を用いて、活字化されていない声を集める必要がある。研究代表者は、本研究の研究分担者や研究協力者などとともに、2006年に日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイブを設立し、以後、美術関係者のオーラル・ヒストリーの収集を行ってきた。本研究を開始する前に、すでに35名の聞き取り調査を合計54回実施していた。2009年11月には国立国際美術館で「オーラル・アート・ヒストリーの可能性」と題するシンポジウムを行い専門家を招いて公開討議するなど、研究成果の公表にも努めてきた。

上記の活動を通して、とりわけ地方の活動を視野に入れた、1960年代の前衛美術に関する聞き取り調査を集中的に行う必要があると考えて、本研究を開始することにした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、オーラル・ヒストリーの方法を用いて、1960年代の日本における前衛美術に関する研究を再構築することである。これまでこの時代の前衛美術に関する研究は、東京の活動を中心に、美術雑誌や展覧会図録などの文書記録に基づいて行われてきた。本研究は、東京以外の地方の活動も視野に入れながら、美術関係者への聞き取り調査を行うことによって、作品の制作過程や作家の生活環境などを含む作家の活動全体を調査し、1960年代の前衛美術の展開を多角的・総合的に明らかにすることを目指した。

3. 研究の方法

まず、調査対象の当事者や関係者、彼らが関わった諸動向に関する文献調査を行い、まだ十分に語られていないことを重視しつつ、網羅的な質問項目を作成した。調査対象に詳しい専門家にも意見を聞いた場合もある。

質問項目をもとに、オーラル・ヒストリー（口述史料およびその研究）の方法で聞き取り調査を行った。1960年代の前衛美術の当事者や関係者に対して、直接関係した美術の動向だけでなく、その人の人生や活動についても話を聞いた。オーラル・ヒストリーは、ある美術の動向だけでなく、それが生じた歴史的、地域的、思想的な文脈の一端を明らかにすることができる。そして複数の人々に対して聞き取り調査を行うことで、その文脈に対する理解をより正確で緻密なものにしていくことができる。

聞き取り調査は、研究代表者と3名の研究分担者に加えて、8名の研究協力者とともに行った。3年間で行った47名の聞き取り調査のうち36名の調査に対して、34名の専門家の協力を得た。米国在住の日本人作家に対する聞き取り調査は、米国の美術館や大学に勤務する4名の研究協力者の協力を得た。

4. 研究成果

3年間で、1960年代の前衛美術に関連した美術家、デザイナー、写真家、建築家、音楽家、美術評論家、画廊主、団体職員、美術書店経営者およびその家族に対して、合計47名、90回のインタビューを実施した。

2010年度は、九州派、読売アンデパンダン展、幻触、もの派、美術家共闘会議などの美術団体に関わった美術関係者、アメリカ国籍の美術団体関係者など19名に対して合計31回のインタビューを実施した。

2011年度は、一部1950年代にさかのぼって、前衛美術会、デモクラート美術家協会、GUN、フルクサス、グループ〈位〉、美術家共闘会議などの美術団体に関わった美術関係者16名に対して、合計23回のインタビューを実施した。前衛美術に自覚的に取り組んだ美術家を中心に行ったが、前衛美術に懐疑を抱き始めた世代の美術家にも話を聞いた。2012年度は、一部1950年代や1970年代の活動にも触れつつ、ルポルタージュ絵画、具体美術協会、高知の前衛美術、群馬NOMOグループ、美術家共闘会議などの美術団体に関わった美術関係者、国際芸術見本市協会や大阪の画廊の美術関係者、グループ音楽に参加した音楽家、反芸術や万博と関係した建築家など16名に対して、合計26回のインタビューを実施した。前衛美術の運動の広がりや調査するために、前橋や高知といった地方で前衛美術に取り組んだ美術家、前衛美術を国内外に紹介した美術評論家・美術館学芸員や団体職員、前衛美術の隣接領域で活動した音楽家や建築家にも話を聞いた。

前衛美術運動は、美術という普遍的な概念のもとで先端的な表現を追究し、その概念を更新しようとした運動と考えられることが多いが、本研究の結果、地方の文化や社会、ジェンダーの問題、国内外の他芸術動向などと深く関係しながら、多様な個別的論点を含んで展開した動向であることが分かった。美術に関する意識は都市部と地方で大きな違いがあり、前衛美術の運動は多くの場合、地方での展開において大きな困難を伴った。前衛美術の運動を担った美術団体は多様で、美術団体ごとに理念や活動内容が大きく異なっていた。歴史的・造形的な側面が強調される場合もあれば、政治的・社会的な意味が強調された場合もあったが、政治の前衛と直接結びつくことは基本的になかった。アメリカ

では1950年代末までには使われることが少なくなっていた「前衛」の概念は、日本では1960年代においても依然として使われ続けたが、デザイン、写真、映像、音楽、建築などの隣接領域と密接な関係を持ちながら展開した点に大きな特徴があり、時代が下るにつれて、その傾向が強まっていったことが分かった。

本研究によって、1960年代の日本における前衛美術に関する口述史料を作成することができた。すでに公開しているものもあるが、この口述史料はすべてウェブサイトで公開する予定であり、今後の戦後日本前衛美術に関する研究の発展に大いに貢献するだろうと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計11件)

- ① 加治屋健司「横尾忠則のエクリチュール」『ユリイカ』、査読無、第44巻第13号、2012年11月、214-221頁。
- ② 加治屋健司「創造のための批評」とその時代」『「中原佑介美術批評選集」通信』、査読無、2012年、1-7頁。
- ③ 加治屋健司「石子順造の知覚論的展開マンガ批評を中心に」『美術フォーラム21』、査読無、第24号、2011年11月、104-112頁。
- ④ 加治屋健司「原爆を目撃した画家、しなかった画家 原爆の目撃とその視覚的表象」『原爆文学研究』、査読有、第9号、2010年12月、69-86頁。
- ⑤ Hiroko Ikegami “On the Practice of Oral History Archives of Japanese Art: Toward Oral Histories of Art in Asia,” *Field Notes*, Issue 2, 2012, pp. 25-48. (査読無)
- ⑥ Hiroko Ikegami “The ‘Triumph’ of Japanese Neo-Pop: A Historical Evaluation,” *Journal of Korean Association for History of Modern Art* 12 (December 2011): 221-251. (査読有)
- ⑦ Hiroko Ikegami “‘World without Boundary’? EAT and the Pepsi Pavilion at the Expo ’70, Osaka,” *Review of Japanese Culture and Society* (Josai University, December 2011): 174-190. (査読有)
- ⑧ 池上裕子「ポスト・コンフリクトの日米美術交流」、『コンフリクトの人文学』、査読有、第3号、2011年3月、41-59頁。
- ⑨ 牧口千夏「笠原恵実子 inside/outside 新収蔵作品を中心に」『京都国立近代美術館研究論集CROSS SECTIONS』、査読無、第4号、2012年、106-112頁。
- ⑩ 栗田大輔「1950年代へのパースペクティヴ」『「中原佑介美術批評選集」通信』 査読無、2012年、7-12頁。
- ⑪ 栗田大輔「予兆としての「絵面」 《干渉率B (空間に)》」『榎倉康二展冊子』、査読無、2010年5月、16-28頁

[学会発表] (計23件)

- ① 加治屋健司「コンテクストの手触り」、第8回アジア次世代キュレーター会議、東京、国際交流基金、2012年12月22日。
- ② 加治屋健司「現代美術におけるコンテイングジェントなイメージ」、表象文化論学会第7回研究発表集会ミニシンポジウム「イメージの権利」、東京、東京大学、2012年11月10日。
- ③ 加治屋健司「国内外の美術アーカイヴ」、京都市立芸術大学連続シンポジウム「創造のためのアーカイヴ Part 1 未完の歴史」、京都、京都市立京都堀川音楽高校、2012年10月7日。
- ④ 加治屋健司「始まりの中原佑介」、京都精華大学岡本清一記念講座連続シンポジウム「批評の技法 現代美術の実践とことば 中原佑介の業績をたどる」、京都、京都精華大学、2012年1月21日。
- ⑤ 加治屋健司「中原佑介とその時代」、「中

- 原佑介を読む 美術批評の地平 〈50 年代へのパースペクティブ〉」、横浜、BankART Studio NYK、2011 年 6 月 6 日。
- ⑥ 加治屋健司 「森村泰昌とその時代」森村泰昌展記念講演会、広島、広島市現代美術館、2010 年 12 月 4 日。
- ⑦ 加治屋健司 「日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴの取り組み」、「舞台芸術研究におけるオーラル・ヒストリーの可能性」研究会、東京、早稲田大学、2010 年 11 月 26 日。
- ⑧ 加治屋健司 「見なかった者が描く絵画 非目撃者による原爆の視覚的表象」、2010 年度日本社会文学会秋季大会・第 32 回原爆文学研究会例会、シンポジウム「原爆表象／文学と政治的リアリズム」、東広島、広島大学、2010 年 10 月 3 日。
- ⑨ Kenji Kajiya, "Reactivated Trauma: Visual Performance of Nakazawa Keiji's Barefoot Gen," Crossroads in Cultural Studies, Association for Cultural Studies Conference, Hong Kong, June 18, 2010.
- ⑩ Hiroko Ikegami, "Recontextualizing Neo-Dada: Jasper Johns in Tokyo, 1964," School of Art Institute, Chicago, April 2013.
- ⑪ Hiroko Ikegami, "Notes on Pop in Japan, Part 2," University of California, Berkeley, February 2013.
- ⑫ 池上裕子 「日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴの活動について」、シンポジウム「戦後美術アーカイヴ その課題と展望」、神戸、横尾忠則現代美術館、2013 年 1 月。
- ⑬ Hiroko Ikegami, "Who Is Afraid of Pop? Remaking American Pop by Ushio Shinohara and Elaine Sturtevant," Comité international d'histoire de l'art, Naruto, January 2013.
- ⑭ Hiroko Ikegami, "Shinohara Pops! Or How to Make Pop Ukiyo-e," New York Conference for Asian Studies, SUNY New Paltz, September 2012.
- ⑮ 池上裕子 「ポロックを売る、ポロックを買う アメリカ美術の国際市場形成について」、ポロック展記念シンポジウム、東京国立近代美術館、2012 年 3 月。
- ⑯ Hiroko Ikegami, "Looking and Being Looked At: Jasper Johns in Tokyo, 1964," in a panel "Pop and Politics," College Art Association, Los Angeles, February 2012.
- ⑰ Hiroko Ikegami, "The 'Triumph' of Japanese Neo-Pop: A Historical Evaluation," 12th International Conference of Korean Association for the History of Modern Art, Ewha Woman's College, Seoul, October 2011.
- ⑱ Hiroko Ikegami, "World without Boundary? EAT Goes to Expo '70, Osaka," Harvard University, November 2010.
- ⑲ Hiroko Ikegami, "Toward Oral Histories of Art in Asia," 6th Asian Museum Curators' Conference, Venkatappa Art Gallery, Bangalore, October 2010.
- ⑳ Hiroko Ikegami, "How New York Defended the Idea of Modern Art: A Case of Postwar Art from Japan, 1966," Asian Studies Conference Japan, Waseda University, June 2010.
- ㉑ Hiroko Ikegami, "Introducing the Art under the Nuclear Umbrella: *The New Japanese Painting and Sculpture* at the Museum of Modern Art, New York," University of Michigan Museum of Art, April 2010.
- ㉒ 粟田大輔 「情報技術時代の表現者」、シンポジウム「21 世紀だヨ！石子順造」府

- 中、府中市美術館、2011年12月23日。
- ②③ 栗田大輔「50年代へのパースペクティブ」「中原佑介を読む 美術批評の地平」横浜、BankART Studio NYK、2011年6月6日。

〔図書〕(計10件)

- ① Kenji Kajiya et al., ed. *From Postwar to Postmodern, Art in Japan 1945-1989: Primary Documents*. New York: Museum of Modern Art, 2012. 440 p.
- ② 加治屋健司、栗田大輔他『前衛のゆくえ アンデパンダン展の時代とナンセンスの美学 (中原佑介美術批評選集第3巻)』、現代企画室+BankART出版、2012年、309頁。
- ③ 加治屋健司、栗田大輔他『現代彫刻論 物質文明との対峙 (中原佑介美術批評選集第6巻)』、現代企画室+BankART出版、2012年、281頁。
- ④ 加治屋健司他『創造のための批評 戦後美術批評の地平 (中原佑介美術批評選集第1巻)』、現代企画室+BankART出版、2011年、253頁。
- ⑤ 加治屋健司他『「人間と物質」展の射程 日本初の本格的な国際展 (中原佑介美術批評選集第5巻)』、現代企画室+BankART出版、2011年、209頁。
- ⑥ 加治屋健司他『世界のコミックスとコミックスの世界 グローバルなマンガ研究の可能性を開くために』、京都精華大学国際マンガ研究センター、2010年、330頁。
- ⑦ Hiroko Ikegami, *Shinohara Pops! The Avant-Garde Road, Tokyo/New York*. Albany: SUNY Press, 2012. 128 p.
- ⑧ Hiroko Ikegami, et al. *East-West Intersections in American Art: A Long and Tumultuous Relationship* Washington, D.C.: Smithsonian Institution Scholarly Press, 2012. 289 p.

- ⑨ 池上裕子他『コンフリクトのなかの芸術と表現 文化的ダイナミズムの地平』大阪大学出版会、2012年、371頁。
- ⑩ 牧口千夏他『井田照一の版画』、京都国立近代美術館、2012年、203頁。

〔その他〕
ホームページ等
<http://www.oralarthistory.org/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

加治屋 健司 (KAJIYA KENJI)
広島市立大学・芸術学部・准教授
研究者番号：70453214

(2) 研究分担者

池上 裕子 (IKEGAMI HIROKO)
神戸大学・国際文化学研究科・准教授
研究者番号：20507058

牧口 千夏 (MAKIGUCHI CHINATSU)
京都国立近代美術館・学芸課・研究員
研究者番号：90443465

栗田 大輔 (AWATA DAISUKE)
東京芸術大学・美術学部・講師
研究者番号：60537421